

小林秀雄著『本居宣長』:二十一章主題(歌の美しさがわが物となるとは、歌の歴史がわが物になるといふ事)の「関係論」的纏め。

《関係論:『新古今』》:「歌の美しさ」がわが物となるとは、「歌の歴史」がわが物になるといふ事。

①歌(物:場 C')②面倒な経験(物:場 C')③歌の美しさ(物:場 C')⇒からの関係:言はば①に強ひられた「④:この②(歴史感覚を錬磨)を重ねてあるうちに、③がわが物となる」(D1の至大化)⇒「⑤:歌の歴史」(④的概念F)⇒E:「③がわが物となるとは、⑤がわが物になるといふその事だ」と悟る[即ち『此の道(歌道)も世世をへて、新古今に至つて全備』『此道の至極せる處』だと悟る]に至つたと語る」(⑤への距離獲得:Eの至大化)⇒宣長(△杵):③への適應正常。

《関係論:『新古今』》:宣長は『新古今』で、和歌の「取り附く島もない、生まな歴史像」を、「歌の傳統と言ふ像」に變じた。

①和歌の歴史(物:場 C')②詠歌(物:場 C')③特殊な事件の連續體(物:場 C')⇒からの関係:①とは、②といふ一回限りの③であり、その始まりも終りも定かならず、その發展の法則性も、到底明らかに掴む事が出来ない、「④:取り附く島もない、生まな歴史像と言へる」(D1の至小化)⇒「⑤:歌の傳統と言ふ像」(④的對立概念F)⇒E:④が、⑥による『新古今』の姿[とは「歌の自律的な表現性(F)に、歌人等(△杵)の意識が異常に濃密(Eの至大化)」になつた姿]の直知(Eの至大化)によつて、目標・意味(「發展の法則性」)が読み取れる⑤(即ち「親しく附合へる人間のやうな面貌」)に變じた(Eの至大化)のであつた」(⑤への距離獲得:Eの至大化)⇒⑥宣長(△杵):①への適應正常。

